

絵姿女房・仁多郡奥出雲町大馬木

令和3年5月18日掲載

収録・解説・酒井 董美^{たまたよし}

イラスト・福本 隆男



語り手 千原貞四郎さん
 (明治21年生まれ)
 収録・昭和47年8月2日

あらすじ

昔、独り男が野菜を町へ持つて出て売っていたげな。竜宮さんに、「ちつと雨を降らせんように」と頼んで、野菜売りに出るたびに、野菜を橋の上から川へ投げて「竜宮さん、野菜を作らにやならんに雨が降っていけません」と祈っていた。

ある日、よい女が来て、「たいした養あてもらわいでもええけに、おまえの女房にしてごせえ」

その男は、あんまりいい女なので、放つておいて仕事に出ることはいやで、似た絵を描いてもらつて、自分の鼻先の竹に絵を挟んで、見ながらでない仕事ができなくなつたげな。そうしていたら、大風が吹いて、それを飛ばしてしままい、それが殿さんの庭へ落ちたげで、
 「この女房、妃に迎えて来い」と申しつけられたげな。
 家来は「女房は、殿さんとこへいま連れて行く」「いやだ」

「殿さんの女房に出さんようなら、焼き縄三束持つてきて納めい」

そこで男が女にその話をしたら、女は、「みやすいことだ。その縄を三束ほどニガリ(苦汁)の中へつけちよいて、あげて、それを焼きやあ、硬い硬い焼き縄になあけん」
 「叩かぬ太鼓の鳴る太鼓、笛を吹いて舞う男、を持つて来い」

女房に話したら、「山へ行って大きな蜂の巣を取つて太鼓の中へ入れて蓋あして、持つて行って、殿さんに『一人一人間に入つて蓋あ取らつしやい』言いて持つて行きなはい」

男が持つて行って、そう言うくと、

殿さんが一人一人入つて蓋を取られたら、中から蜂が、ポン、ポン、ポン、ポン、ポンポポンと言って飛び出してきた。殿さんを刺すやら何やらで。それから殿さんは口笛を吹いて舞い出されたら、男が、「こゝろが叩かぬ太鼓の鳴る太鼓、笛を吹いて舞う男」と言うくと、殿さんは、「もつとむつかしいことを言いつけてやろう。大もつけ、小もつけつう者を連れて来うか、女房を渡すか」

男はまた帰つて女に話した

げな。
 「やあ、大もつけ、小もつけやな強ええ者が殿さんとこへ行つてしまつてなら、殿さんの家が潰れえが、そうでもないだらか」と言う。

男はまた殿さんのところへ行つて話を話したら、
 「ああ、そうでもないけん連れて来て来い」。男は帰つて言った。

「そうでもないけん連れて来い」つうことだわ。女はそれを聞くと、
 「おらが連れて来うけん」と言つたげな。その女が龍宮界の乙姫さんだつたげで、その手下に大もつけ、小もつけというすがい者がいるが、男はそのことを知らず、女がそれを連れて殿さんの家へ行ってメラメラーといつて壊れてしまつたげな。

それで何でもほどを知らず、何でもかんでも人にむづかしことを言うものではないと。昔(こぼし)。

解説

関敬吾『日本昔話大成』で本格昔話の婚姻・難題智の「絵姿女房」としてその戸籍がある。

(元島根大学法文学部教授)